近代友禅デザインの仮想と現実

—デザイン原画とデジタルミュージアム—

2012年10月29日〔月〕–11月26日〔月〕

◆◆　はじめに　◆◆

文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ」拠点（立命館大学）（京都文化研究班木立研究室）・文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」（木立研究室）では、近代の染織デザイン（図案・絵摺類）を収集し、その修復とデジタル・アーカイブを行ってきました。その資料価値について企画展などで展示・公開し、図案の価値について訴え続けてきました（本学平和ミュージアム、アート・リサーチセンター）。

今回の展示では、「近代」をイメージしたデザインを展示し、伝統柄や折衷柄との比較検討をしたいと思います。戦前の和服デザインは極めてモダンであるとともに、「伝統」に対して固執している側面もあり、そのことが図案に明瞭に示されています。図案は、図案家の足跡を語る貴重な歴史資料でもあるのです。

また、本学映像学部細井研究室により、仮想空間である「セカンドライフ」でも本学の資料を鑑賞できる展覧会を開催することができました。今回展示された図案は、いずれも「セカンドライフ」内で展示されています。仮想と現実の双方を見比べて鑑賞していただきたいと思います。

2012年10月吉日

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」
木立研究室

〇企画協力
立命館大学映像学部細井研究室
塚越　勇太

立命館大学文学部京都学プログラム・京都学木立・山本ゼミ受講生
小野　瞳、出町　真由子、戸嶋　麻裕、簑田　奈美、脇田　郁芳、吉本　優里

本展で紹介している資料の保存・活用活動には、立命館大学文学部の学生が参加しています。また、今回の展示品の選定、一部の展示解説文は本学文学部京都学プログラム・京都学木立・山本ゼミ受講生が担当いたしました。学生のみなさんの協力に感謝するとともに、今後も資料保全・活用活動の担い手として、また発信者として活躍してくれることを期待します。

◆◆　近代の着物図案の保存・活用の現状と木立研究室の取り組み　◆◆

山本　真紗子

木立研究室ではこれまで、文部科学省グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）内のプロジェクトの一つとして、アート・リサーチセンター所蔵近代染織資料群の整理と活用にむけての活動を続けてきた。本センターへの収蔵の経緯や整理作業については、旧稿[1]や展示にて紹介している。現在、整理作業は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」内のプロジェクトとして引き継がれている。

本学の資料は、京都市内の染業者が廃業等の理由で古書店に売却したと考えられる資料を中心に収蔵している。数回にわけて入手しており、それぞれに性格が異なるが、現在おもに整理をすすめている 6 群の資料は、明治末から昭和初期にかけての型友禅の図案である。いわゆる一点もの、美術工芸品、あるいは礼装・正装用の着物に用いられてきたものというよりは、日常的に着用されてきた着物を製造するためのものが多かったと考えられる。このような着物の現物や、それを製造するための図案や型紙といった資料は、当時の染織産業や服飾・デザインについての重要な参考品となるはずである。とくに京都市にとっての染織産業は、経済や生活文化、地域空間の形成の上で大きな役割を果たしてきた基幹産業のひとつであり、本学の所蔵品もそうした意味で興味深い。

本学所蔵図案の一例

しかし、近現代の着物については、美術工芸品として価値があると認識されるような一部を除いては、研究が進んでいない部分も多い。資料についても、公的な機関の収蔵や公的なコレクションの形成によって研究や保護がすすめられてきたというよりは、国内・国外のコレクターにより守られてきたといえる[2]。近年、若い女性を中心に、大正期～昭和初期の着物が「大正レトロ」や「昭和モダン」

---

[1]木立雅朗「韓国併合を祝賀した友禅染」および山本真紗子「立命館大学アート・リサーチセンター所蔵友禅図案資料群の整理作業」。文部科学省グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）監修/冨田美香ほか編『シリーズ□日本文化デジタル・ヒューマニティーズ 05　京イメージ―文化資源と京都文化―』ナカニシヤ出版、2012 年所収。

[2] 海外では、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館やボストン美術館、ホノルル美術館等の収蔵品に着物が含まれることが知られる。森理恵、テリー・五月・ミルハプト、セー

として人気が高いものの、この種の着物や図案を資料として収蔵・保存している施設は珍しかった。しかし、こうした状況は現在かわりつつある。

例えば、京都市内の NPO 法人・京都古布保存会[3]では、明治期から昭和期の銘仙やお召の着物や布の寄贈をうけるとともに、寄贈者からの聞き取り調査を実施している。その着物を誂えた時期、着物の所有者の生活史や着用したシーンについて記録し、着物とともに所蔵することは、着物やそこに描かれた図柄のもつ意味を理解し、着物の果たした役割を把握する上で非常に重要である。

京都市内の大学では、近年、近代染織産業に関する資料の所蔵や研究がすすめられている。立命館大学でも、木立研究室のほかに、工芸プロジェクト・染色型紙デジタル・アーカイブとして伊勢型紙アーカイブ（株式会社キョーテック所蔵伊勢型紙コレクション・吉岡コレクション）が作成された（研究者のみに公開）。京都工芸繊維大学では京都高等工芸学校関係資料、京都工芸繊維大学所蔵の寺田哲朗（機械捺染図案家、日本図案家協会）関連資料を所蔵しており、主として美術工芸資料館での展覧会で公開している[4]。京都精華大学の「田中直コレクション」は、京都の染料販売会社「田中直染料店」の店主により蒐集された伊勢型紙のコレクションである。赤外線カメラでの商印と書き入れ（墨書・朱書）の調査を行い、データベースを同大学情報館ウェブサイト内で公開している[5]。

京都市外の動きはどうか。昭和のくらし博物館[6]や信州須坂田中本家博物館[7]のように、近現代のくらしをテーマとした展示のなかで、当時の着物が展示されている施設も少ないながら存在する。くらしのきもの資料館（2011 年閉館）の資料を収蔵した武庫川女子大学[8]や、料理研究家で物書きの大村しげが使用していた生活財をそっくり収蔵した国立民族学博物館の大村しげコレクション[9]などは、今後の研究の拠点となっていくだろう。加えて、国立歴史民俗博物館では、本館展示第四室のリニューアル（2013 年 3 月オープン予定）の構想のうち、近代にみる「伝統」の商品化の一事例として、三越による「江戸」の商品化が共

ラ・フレデリック、鈴木桂子「20 世紀における「きもの」文化の近代化と国際化 －物質文化・表象文化の視点から－」文化学園大学服飾文化共同研究報告、2012 年。

[3] http://www.hozonkai.org/（2012 年 10 月現在、以下同）

[4]並木誠士・青木美保子・山田由希代「昭和初期京都における染色産業の一側面―寺田資料の紹介と位置づけ」『人文（京都工芸繊維大学工芸学部研究報告）』54、2005 年、pp.135-145。「ここにもあった匠の技―機械捺染―」展（京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2010 年 8 月 9 日～10 月 1 日）。「京都のモダンデザインと近代の縞・絣」展（京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2011 年 9 月 20 日～10 月 28 日）。

[5]小森綾子「田中直コレクション　染の型紙（東北地方）－商印・墨書から流通をみる－」『京都精華大学紀要』25、2003 年

[6]東京都大田区。 http://www.showanokurashi.com/top.html

[7]長野県須坂市。http://www.tanakahonke.org/

[8] 武庫川女子大学資料館・生活文化玉手箱シリーズ①着物の文字紋に託された世界」（2010 年 10 月 20 日～12 月 3 日）、同生活文化玉手箱シリーズ③「色香り街に咲くキモノの華物語～明治・大正・昭和のお召を中心に～」（2012 年 10 月 17 日～11 月 28 日）。

[9]横川公子・笹原亮二編『モノに見る生活文化とその時代に関する研究―国立民族学博物館所蔵の大村しげコレクションを通して―』国立民族学博物館調査報告、2007 年

同研究のテーマとして取り上げられた。そのなかで、重要な事例として注目されているのは、三越による着物の新図案創出事業や、着物の通信販売等である。共同研究の成果は今後の展示にも反映される予定である[10]。また、千總ギャラリー[11]、J フロントリテイリング史料館[12]や髙島屋史料館[13]など、近代の着物の流行を牽引した呉服店や百貨店による展示施設も充実した活動をおこなっている。

このように、近代の染織・着物図案の研究は新たな局面を迎えているといえる。様々な機関による資料の収蔵が徐々に充実しておきており、またその位置づけや調査研究についても、従来の服飾史やデザイン史、産業史といった観点のみならず、さまざまな視点から検討が加えられている。着物や図案そのものの研究以外に、近代における「伝統」の発見と普及、あるいは大衆文化との関わりといった、着物を「商品」や「媒体」としてとらえる新たな切り口がもちいられていることも、近年の特徴であるといえよう。

さて、木立研究室では、このような現状を踏まえ、本学所蔵の資料群について、どのような活用をおこなうべきか、いくつかの方法を模索してきた。まずは、いわゆる研究資料として使用することが第一義の目的であるため、資料を保全しつつより利用しやすい形態であるデジタル・アーカイブの作成作業に着手した。そして、作業をすすめるため、夏期や冬期の長期休暇を中心に、本学文学部の学生による所蔵資料の整理作業をおこなっている。この学生による作業というのが、大学で活動する利点であり、また本プロジェクトの大きな特徴である。

2012 年夏季整理作業の様子

作業の様子については、2011 年度のアート・リサーチセンターでの「近代をのこす、つたえる」展でも詳しく紹介している。主な作業は、古書店から購入した資料の汚れやホコリをはらい、番号をつけ、破損部分に補修をほどこし、デジタルカメラによる撮影をおこなうというものである。この一連の作業を 10 名程度の学部学生が担当し、1 週間から 10 日程度の期間で数千枚の資料の整理と画像撮影をおこなうことができた。このほかにも、整理作業や調査の成果報告として、展覧会を実施し、学生たちに自分たちがおこなった作業の解説文の作成や、展示する図案の選定、解説文の執筆も担当してもらった。今回の展示

---

10 共同研究「歴史表象の形成と消費文化」。第 85 回 歴博フォーラム 「『江戸』の発見と商品化－大正期の三越の流行創出と受容」（2012 年 9 月 15 日開催）。

11 京都市中京区。http://www.chiso.co.jp/

12 旧松坂屋京都染織参考館で所蔵していた染織資料コレクションが、2007 年松坂屋と大丸の経営統合による業務見直しにより、J フロントリテイリング史料館（愛知県名古屋市中区）と名古屋市博物館に移管された。

13 大阪府大阪市浪速区。http://www.takashimaya.co.jp/corp/info/library/index.html

にあたっても、資料の整理作業とともに、出品物の選定や展示解説文の作成などにも立命館大学文学部京都学プログラムの学生（木立・山本ゼミ）を中心に学生の参加を得た。

このような作業を通して、近代資料の性格やその保存・活用方法について学習することは、学生にとっては資料に関する知識や方法論の習得という狭い範囲の学習にとどまらず、地域の歴史やそれを伝える資料の継承・活用を学ぶ貴重な機会になるのではないかと考える。とくに、本作業に参加する京都学プログラムの学生は、京都という地域を学習・研究のフィールドとしている。近代京都を様々な意味でささえてきた染織産業の資料を直に手にとってみることで、当時の社会をかいまみたり、過去と今日とのつながりを考えたり、また現在の染織産業のおかれている状況についても知ることができる。資料群が教育活動のための資源となることができるのである。

セカンドライフ　展示会場入口
（細井研究室提供）

そして、今回の展示のもうひとつのテーマは「仮想」と「現実」である。「仮想」とは、「セカンドライフ」というツールを用いて、図案の展示を指す。「セカンドライフ」上の展示空間は、立命館大学映像学部細井浩一研究室により構築された。海外のユーザーも多いことから、展示につける解説文には英文を併記している。

専門家やコレクターなどを除いては、海外での「キモノ」のイメージは、イベントや写真などにから想起されるものであろう。そのため外国人向けの土産用につくられたキモノ・コートやハッピ・コートといった、日本人からすると着物であって着物でないようなものも存在する。大正期や昭和期の着物図案は、海外のさまざまなモチーフやデザインを取り入れており、同時代の社会風俗を織り込んだ時事的な柄・画題も多く見られる。とくに「面白柄」と呼ばれるような、同時代風俗を描いたものは、一般にはそれほど知られていないようだが、当時の着物の性格を知る上でも注目すべきものである。海外でも、こうした柄が存在することは一部のコレクターにしか知られていないものと思われる。そのため、オーソドックスないわゆる「着物」の図案とともに、そうしたイメージをいい意味で裏切るようなデザインを中心にとりあげることにした。作家による一点もののような“作品”は別として、当時の多くの人々が身に着けていた、このような着物は、日本人であっても実際に目にする機会はあまりない。「セカンドライフ」という場が、日本の文化や伝統産業、染織文化についてアピールするコンテンツとして利用するという、資料の新たな活用法を提示してくれたといえる。

また、今回、本学所蔵図案のもうひとつの活用事例として、“友禅鏡”の製造をあげたい。我が国では、古代から、中央に鈕（つまみ）をつけた金属製の鏡がつくられた。鏡背に文様や図柄をいれることができ、動物や植物をはじめさまざまな図案が描かれてきた。そのため、神器として信仰の対象となり、日常の道具として用いられるだけでなく、現在では美術工芸品としても扱われる。材質は青銅・白銅・鉄などがあり、各時代によって形や鏡背の文様が異なる。明治時代になりガラス製の鏡が普及すると、銅の鏡はしだいに用いられなくなり、鏡を作成する鏡師も減少している。

今回、木立研究室では、「図案」がもつ汎用性や和鏡と友禅図案のそれぞれの特色を明らかにするため、所蔵する図案の中からいくつかのデザインを合成して作成し、株式会社山本合金製作所の山本富士夫氏、山本晃久氏に、友禅の模様を使用した和鏡の製造を依頼した。山本合金製作所は、現在も真土型の技法により手作業で鏡を製作する京都唯一の鏡師である。和鏡の製造技法の継承のほか、他業種とのコラボレーション活動なども積極的におこなっており、今回のような依頼に対しても真摯に取り組んでくださった[14]。

今回作成した“友禅鏡”

和鏡作りを鏡背のデザインからはじめ、真土型作り・鋳造・研磨まですると、完成まで最短でも 3 ヶ月を要する。友禅染に多用される草花や雪の輪、疋田などの文様に加え、通常鏡の文様としては使用されない流水文様などを用いた。花びらのぷっくりとした表現は和鏡の伝統的な技法が活かされており、疋田の表現はこれも鏡によく使用される魚子文の応用がなされている。しかし、通常鏡の文様には無い流水文様の、カーブや曲線の肉付けの処理などは苦労が多かったようだ。同じように“伝統的”な模様や図案を用いていても、生地という平面に表現する友禅と、型の凹凸をもちいて表現する和鏡の違いが明らかになったといえる。この“友禅鏡”についても、「セカンドライフ」上での再現を試みており、本プロジェクトの活動の特徴を示すことができたと考えている。

以上、近年の近代着物・染織図案の研究の動向や傾向を踏まえたうえで、木立研究室が試みる活用事例について述べてきた。研究資料としての使用だけでなく、教育活動の資源、デジタルミュージアムのコンテンツ、そして他の伝統産業とのコラボレーションという、三つの活用方法を提示した。これらの活用方法は、大学がもつ役割を意識することで生まれてきたともいえる。つまり、学生のための教育機関としての側面や、研究成果発信の主体者としての活動、地域への成果還元や技術保存活動への参与といった役割である。今後

[14]なお、今回の製作の様子は、TBS「報道の魂」（2012 年 4 月 15 日放送「近代をのこす、つたえる」）でも紹介された。

も資料の整理や保存のための活動は継続されていくが、大学ならではの活用方法を模索していきたい。

◆◆“友禅鏡”（和鏡）の製造工程◆◆

本学所蔵の図案の活用方法として、また異業種の伝統産業のコラボレーションの試みとして、今回、型友禅図案をつかった和鏡の製作を企画した。2011 年秋に図案づくりからはじめ、約半年間かけて製作をおこなった。

①図案づくり―鏡背にいれる図案を作成する。今回は、本学所蔵図案のなかから、鏡に合いそうな図案を学生が選び、数パターンの図案を作成した。それをたたき台に、木立、学生、山本富士夫氏・晃久氏によりミーティングをかさね、最終稿を決定した。

②真土型（まねがた）の製作―枠の上に真土を 3 層（粗・中・細）塗り重ねて、型の原形を作る。「へら」を用い、砂を押してくぼみをつくることで図案通りの模様を作る。模様ができれば乾燥して素焼きする。

③鋳造―合金（銅と錫）を溶かして流し込み、翌日、真土型の砂をくずして取りだす。

④研磨―やすりで酸化膜を取り、やすりの目を消すために「せん」を使って削る。さらにせんのむらを消すために砥石で研ぎ、砥石の粗さを消すために炭研ぎで仕上げる。

⑤仕上げ―昔は本研ぎという工程があり、水銀を伸ばして入れ込んでいたが、現在はニッケルメッキを掛けることが多い。

＊今回の和鏡製作は、株式会社山本合金製作所の山本富士夫氏、山本晃久氏によるものです。かつて和鏡は、信仰の対象や日常の道具として人々に身近な存在であり、鏡背に描かれた様々な文様や図柄から、美術工芸品としても尊ばれてきました。しかし、明治時代になりガラス製の鏡が普及すると、銅の鏡はしだいに用いられなくなり、鏡を作成する鏡師も少なくなりました。山本合金製作所は、現在も真土型の技法により手作業で鏡を製作する京都唯一の鏡師です。和鏡の製造技法の継承のほか、他業種とのコラボレーション活動なども積極的におこなっています。

株式会社　山本合金製作所

初代 山本石松　……慶応 2 年（1866）神鏡作りを開業。
2 代目 山本真一　……伊勢神宮式年祭の御神宝鏡をはじめ、宮内省掌典職、内務省神社局、神祇院等をつうじて、日本全国ほとんどの神社の御霊代、御神宝鏡を製作。
3 代目 山本真治（凰龍）……真土型（まねがた）鋳造法の保持により文化庁から無形文化財として認定、勲五等瑞宝章を賜る。魔鏡の製造法の復元を発表。
4 代目 山本富士夫　……隠れキリシタン魔鏡をローマ法王へ献上。
5 代目　山本晃久　……七宝のヒロミ・アートとのコラボレーション作品“balloon”や『KIZUNA』プロジェクトによるワークショップなどの活動を展開中。

京都の工芸資料に関するネット上での仮想展示と状況学習環境の構築に関する総合的研究プロジェクト

Ritsumeikan University Metaverse for Kyoto Traditional Crafts Project

このプロジェクトについて ～ About This Project ～

本プロジェクトは、立命館大学における私立大学戦略的基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合研究」の研究活動の一貫として実施されているサブプロジェクトです。

ネット上の３次元仮想空間において、京都の工芸文化に関する仮想展示を行うためのネットミュージアムを構築することを通じて、３次元仮想空間の特性を生かし、それぞれの工芸品が使用される社会的文脈や状況を含んだ形での、新しい展示の仕組みを実現します。

これによって、京都ならではの様々な工芸品を、社会的文脈や状況に「共に織り込まれた」形で展示し、文化的文脈の中での工芸品の「使用価値」を学ぶための支援環境を構築します。

三次元仮想空間（メタバース）とは？～ About Metaverse and Second Life

メタバース (Metaverse) とは、インターネット上に作られた仮想空間を指す言葉であり、その中では自分自身の分身（アバター）を利用して自由に構築された仮想世界を利用することができます。

その意味では、3D のオンラインゲームなどもメタバースの一つだと言えます。本プロジェクトが用いる「Second Life」は米国の Linden Lab 社が提供する仮想空間の一種です。Second Life には世界中で 1500 万人を超えるユーザーが参加しており、電子掲示板やブログに並ぶ新たなコミュニケーション手段として利用が拡大しています。

本プロジェクトにおける仮想空間の活用事例 ～ Application example in this project

「京都における工芸文化の総合的研究」では、特に、伝統工芸分野において多数の研究プロジェクトが進められており、それらの研究成果の場として仮想空間を活用しています。

本プロジェクトでは、この「京都型友禅ミュージアム」の他に、「伊勢型紙」や「加賀お国染め」などの工芸品のバーチャル展示を行い、仮想空間の特性を活かした展示表現を研究しています。

また、実際のシテ方が舞う能のモーションキャプチャーデータを利用して、自分のアバターを用いて「能」が体験できる仮想舞台も制作いたしました。

Virtual Noh Play

Ise Katagami Gallery

Kaga Okunizome Gallery

GCOE Seminor Center

立命館大学 映像学部 細井研究室
Hosoik Lab, College of Image Arts and Sciences, Ritsumeikan University

◆◆立命館大学アート・リサーチセンター所蔵 染織図案　整理作業 ◆◆

2003 年～2009 年まで　日本史学専攻・学際プログラム学生有志による整理・写真撮影作業を継続。

2008 年夏期整理作業（歴史考古学ゼミ実習）（2008 年 8 月 4 日～9 月 23 日）

2010 年度夏期整理作業（博物館実習）（2010 年 8 月 23 日～27 日、8 月 29 日～9 月 3 日）

2010 年度冬期整理作業（有志による作業）（2011 年 2 月 1 日～11 日）
→夏期は 6 群 2052 枚、冬期は 6 群 2842 枚、5 群 70 枚、9 群 200 枚を整理、要補修分除く。資料をすべて撮影可能に。

2011 年度夏期整理作業（京都学 C ゼミ実習、博物館実習）（2011 年 8 月 5 日～12 日,2011 年 9 月 12 日～9 月 23 日）

2011 年度冬期整理作業（有志による作業）（2011 年 2 月 1 日～7 日）
→6 群　追加所蔵分　3883 枚に番号を付与。要補修分除く資料をすべて撮影可能に。

2012 年度夏期整理作業（京都学 C ゼミ実習、博物館実習）（(2012 年 8 月 3 日～12 日）
→6 群　要修復分を補修。約 1500 枚の画像を撮影、所蔵する図案集の帙作りをおこなう。

●これまでの活動の記録については下記もご参照ください。
◇立命館大学グローバル COE プログラム 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点
京都研究室・木立研究室ブログ http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/
◇アートリサーチセンター　ウェブサイト http://www.arc.ritsumei.ac.jp/

◇文部科学省グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）監修/冨田美香ほか編『シリーズ　日本文化デジタル・ヒューマニティーズ 05　京イメージ―文化資源と京都文化―』ナカニシヤ出版、2012 年

発行日　2012 年 10 月 29 日
編集　文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「京都における工芸文化の総合的研究」木立研究室
連絡先　立命館大学文学部　京都学ゼミ（担当　木立雅朗　山本真紗子）
〒603-8577　京都市北区等持院北町 56-1　立命館大学文学部
電話　075-466-3493　学芸員課程資料展示室
FAX　075465-8188　文学部事務室気付-